

オーストラリアの鉱山跡をたずねて

—別子銅山夢物語(3)—

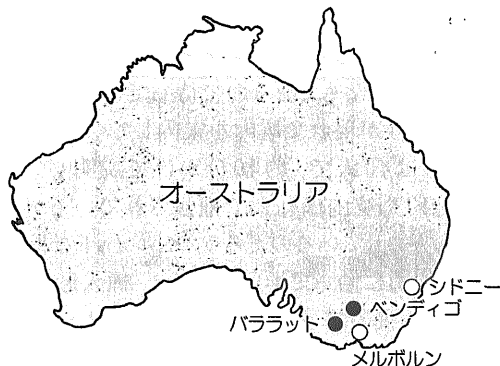
西原 智珂子¹⁾

1. いざ出発

1998年、夏も終わりに近づいたある日、「オーストラリアに行ってみようか。」突然、夫が言い出した。オーストラリアは新婚さんの行くところと思いこんでいた私は、げげんそうな顔をしたに違いない。

「マイントピアのモデルになったバララットにあるソブリン・ヒルへ行こうと思うのだが、見てみんことには話にならない。」百聞は一見にしかずをモットーにしている夫らしい言葉だ。マイントピアは別子銅山の端出場(はでば)採鉱本部の跡地に建設されたテーマパークで銅山の歴史に触れたり、温泉やショッピングを楽しむことができる施設だ。

オーストラリアかあ……。そういえばメルボルンオリンピック(1956年)の時は遙か遠くから送られてくる水泳の山中選手の実況中継をラジオに耳をくっつけて聴いたものだった。2000年はシドニーオリンピック、日本からも大勢の観光客が現地入りするに違いない。クック船長のお話も、小学生の頃に読んだけど、ほとんど覚えていない。オーストラリアに関する私の知識は、その程度のものだけ



第1図 位置図。

ど断る理由もない。「では参りましょう。」

9月27日, JAL 779便で関空を飛び立った。乗り継ぎ地のブリスベンまで8時間25分。国内機を乗り継いでメルボルンのタラマリン空港で降りたのは、私たちだけだった。出迎えの現地案内の方が市内を車で案内してくださった。市庁舎の前を通り、隣のインフォメーションで観光案内図をもらおうと、スペンサー・ストリート駅へ連れていってもらって、ベンディゴ行きの時刻表を手にいれた。

何しろ、今回の旅の目的は鉱山跡を訪ねることなので、ゴールドラッシュ時代の街並みを再現したソブリン・ヒルと、その少し北にあるベンディゴという鉱山町を見ることにしたのだ。

2. ソブリン・ヒルへ

9月29日(2日目)、現地案内の沢さんの車でバララットへ向かう。メルボルンから北西へ112km、1851年に金が発見され、ゴールド・ラッシュで賑わった町だ。その当時(1851-1861年)を再現したソブリン・ヒルへ直行する。



写真1 パドリングマシーン(かくはん機)と中に繋がれている馬(ソブリン・ヒル)。

1) 新居浜市役所：
〒792-8585 愛媛県新居浜市一宮町1-5-1

キーワード：オーストラリア、金鉱山、テーマパーク



写真2 パンという洗面器のようなものを使って砂金採りをしている様子(ソブリン・ヒル)。

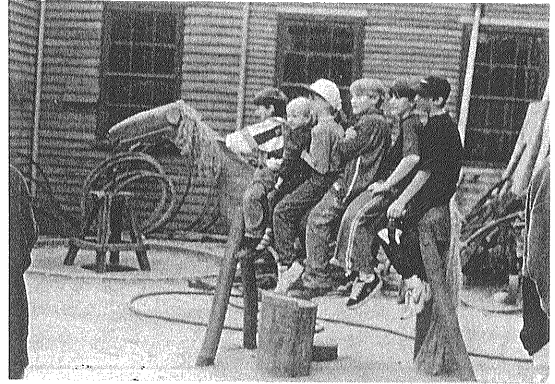


写真3 子供たちが木馬にまたがって遊んでいる様子(ソブリン・ヒル、車輪を作る作業場)。

入り口を抜け、坂を少しかけ登ると、まず目に飛び込んできたのが木でできたパドリングマシン(かくはん機)や巻き上げ機だ。周りには、それぞれ木の柵があって中に馬が一頭ずつ繋がれている。馬を動力に使うって今でもそれらを動かさせて見せてくれる。

そのすぐ奥から小川(といっても茶色の泥水の川)が流れ、大勢の子供たちが砂金採りに夢中になっている。パンという洗面器のようなものを持って、茶色の水をすくって砂や小石の中から金を探し出すのだ。水遊びのようでとても楽しそう。

小川の向こう側にはテント村があり、金を探しにやってきた中国の人たちが住んでいたもので1850年代には、町の人口の4分の1を占めたそうで、中国人のバイタリティを感じてしまう。バララットの地名はアボリジニ語で野営地を意味するそうだ。

ソブリン・ヒルはバララット市の南側にあり、広さ

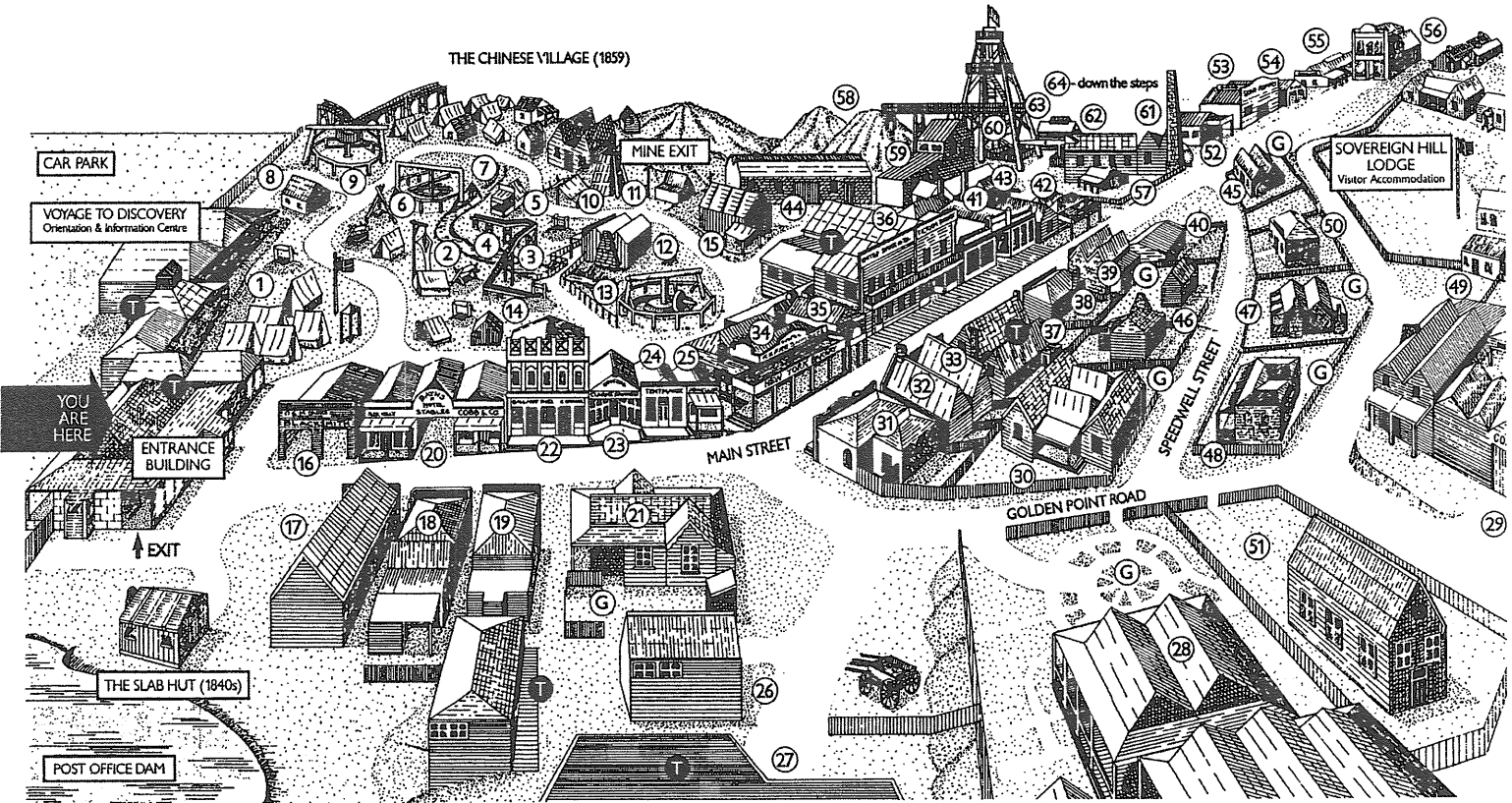
約24ヘクタールの鉱山跡に、当時の建物が40くらい再現されて建っている。教会、学校、新聞社、郵便局、車輪を作る作業場、鉱夫の家。エンジンルームでは薪がくべられ、鏡のように磨き込まれたエンジンが白い蒸気をはきながら、ピストン運転をしている。そして、この動力をもとに外にある揚水機が地下採掘場に流れ込んだ水を汲み上げたり、少し隔てたバッテリー室のベルト・コンベアーが動いたりしている。

木を材料にして車輪を作っている作業場では、子供たちが6人も木馬にまたがり木馬に話しかけている様子は、プラスチック製の遊具にはないほのぼのとした暖かさが漂う。また、真っ赤に焼けた鉄を鑄型に流し込む作業を説明しているところ、土をこねてコーヒークップや水瓶を作っているところ、石鯨やろうそく作り、それらはどれも当時のやりかたで作られているのだが、木を曲げて車輪を作っていく技術などは、ほかではもう見ることのできない珍しいものになってしまったそうだ。

坑道内の見学もできるので待っていると、20歳くらいの女性が現れて坑内を案内してくれた。1回の見学者は40人で、約40分かけて説明してくれる。入り口や坑内は丸太で補強されているが、岩盤がしっかりしているのだろう。ヘルメットなどはかぶらず、軌道に沿って歩いていくと、蠟人形を使って当時の採掘の様子を再現していた。人がやっと入れるくらいの穴に座り込んでつるはしで掘っている様子、フロックコートを着てトランシットを使って測量しているふうの蠟人形もあった。坑道の中は、国境に関係なくどこもよく似ている。



写真4 メイン・ストリートを当時の兵士の服装で歩いている様子(ソブリン・ヒル)。



第2図 ソプリン・ヒルの地図(ソプリン・ヒル案内パンフレットより)。

- | | | | | | |
|------------------|-------------------------------------|-------------------------------|-----------------------------|-------------------|---------------------------------------|
| 1. 金鉱総監の宿舎 | 13. チリ式粉碎機 | 23. クラーク・ブラザース食料雑貨店 | 34. ニューヨーク・ベーカリー | 43. ブラウン菓子製造所 | 55. エンパイアー・ボウリング場 |
| 2. 巻揚げ機と帆布空気取り | 14. 鉱夫の住居 | 24. T.マーフィー・テント店 | 35. グラスゴー馬具店 | 44. ソプリン・ヒル製作所 | 56. ステインフェルド家具店 |
| 3. 小川(金のかくはんと選鉱) | 15. 鉱夫の礼拝所 | 25. リース&ベンジャミン時計店 | 36. ユナイテッド・ステイツ・ホテル、ビクトリア劇場 | 45. テイラーの家 | 57. 鉱山監督の家(鉱山案内所) |
| 4. 人工水路 | 16. デイルジェズ鍛造店 | 26. 馬屋 | 37. チャーリー・ネイピア・ホテル | 46. チェンパーとウェインの家 | 58. 魔石の山 |
| 5. レモネード・テント | 17. カーバー&ダルトン競売所 | 27. リフレッシュメント・キオスク | 28. 「ブライト・ビュー」 | 47. ダビッドソンの家 | 59. バッテリー室 |
| 6. かくはん機 | 18. ホープ・ベーカリー | 29. W.プロクター馬車・車輪製造所 | 30. リントンの家 | 48. 「セント・アイブス」 | 60. やぐらとレバー式揚水機 |
| 7. カリフォルニア式揚水機 | 19. レッド・ヒル写真館 | 31. コロニアル・バンク・オブ・オーストラリアと金交換所 | 32. 薬剤師会館 | 49. 中国人プロテクター事務所 | 61. 動力室、ボイラー室、鉱夫の着替え室 |
| 8. 夫婦用の住居 | 20. アレックス・ケリー、バス・ホテルの馬屋、オーストラリア演劇会社 | 33. ユニバーサル・トランジット・オフィス | 34. クラーク・ブラザース板金店 | 50. レッド・ヒル国立学校 | 62. 鉱山付き鍛造店 |
| 9. 巻揚げ機 | 21. 郵便局 | | | 51. セント・ピーターズ宗立学校 | 63. 鉱夫の家(鉱山ツアーに参加して、ここから地下に下りてみてください) |
| 10. フォーチェリーのテント | 22. バラット・タイムズ社、チャルズ・スペンサー菓子店 | | | 52. ジョン・アール・レストラン | 64. 鉱山監督事務所(鉱山ツアー予約所) |
| 11. レッド・ヒル砂金採取場 | | | | 53. ソーホー鍛造所 | |
| 12. ウォータールー・ストア | | | | 54. 消防署 | |

坑内を出て、少し丘を登ると緑が広がるバララット市街がよく見渡せる。やがて下り坂になると、舗装をしていない乾いた土埃のする道を4頭立ての馬車が見物客をのせてゆっくり通りすぎた。メイン・ストリートには当時の建物を再現したお店が並び、店番のおばあさんは頭にはレースのスカーフをかぶり、長いスカートにエプロンがけでお客がくるのを待っている。キョロキョロしながらのぞいて歩いた。まず雑貨屋で、どぎつい色つきのビーンズ型のあめを買う。それから、印刷屋で夫はバララット・タイムズという新聞を買い、私は布製の袋を買う。これでおみやげはいくらでも入りそう。マーブル模様の石鹸やハーブの花を張り付けたろうそく、薪のかまどで焼いたパン、いろいろ買い込んでしまった。

ちょうど、こちらは学校が休み中だったので子供たちが大勢見学にきていて家族連れでとても賑わっていた。

ソブリン・ヒルの素晴らしいところの一つ目は、建物やそこで働いている人々の服装などを再現して歴史を体現させてくれること。

二つ目は、当時の機械や道具を展示したり、可能な限りそれを動かしていること。

三つ目は、当時のやり方で物作りをしていること。

四つ目は、ボランティアの人々の参加。

これらはイギリスのアイアン・ブリッジ渓谷博物館にあるプリズ・ヒル野外博物館とも共通している。^{注)}

加藤康子氏の「産業遺産」によると、“ソブリン・ヒルは1970年にオープン、初期の開発コストは初年度55万オーストラリアドル(約4,125万円)で、その約半分は市民からの寄付により集められたもので、残りは州政府などからの援助である。また、オープン以来、連邦政府の援助を一切受けずに、ソブリン・ヒルの運営から上がる利益を毎年新規事業開発費に充ててきた。(中略)、実に多くのボランティアが運営にかかわっている。多い時は250人の地元ボランティアを採用するため、全体の人件費、運営費を最低限に抑えることができる。また、地元ボランティアはここで仕事をする際、徹底したトレーニングを受け、自分の演じる役割を理解し、ソブ

リン・ヒルの基本コンセプトをしっかり学び、ソブリン・ヒルの一部として見事な役割を演じている。”ということである。

日本のテーマパークが閉鎖に追い込まれたり、集客に苦勞している中、運営において学ぶべきものが多いのではないだろうか。

3. セントラル・デボラ・ゴールド・マインへ

9月30日(3日目)、2人でメルボルンのスペンサー・ストリート駅からVラインに乗ってベンディゴという町に行った。

ベンディゴはバララットよりさらに北に位置し、1851年から金が掘られ、やはりゴールド・ラッシュに沸いた町だ。

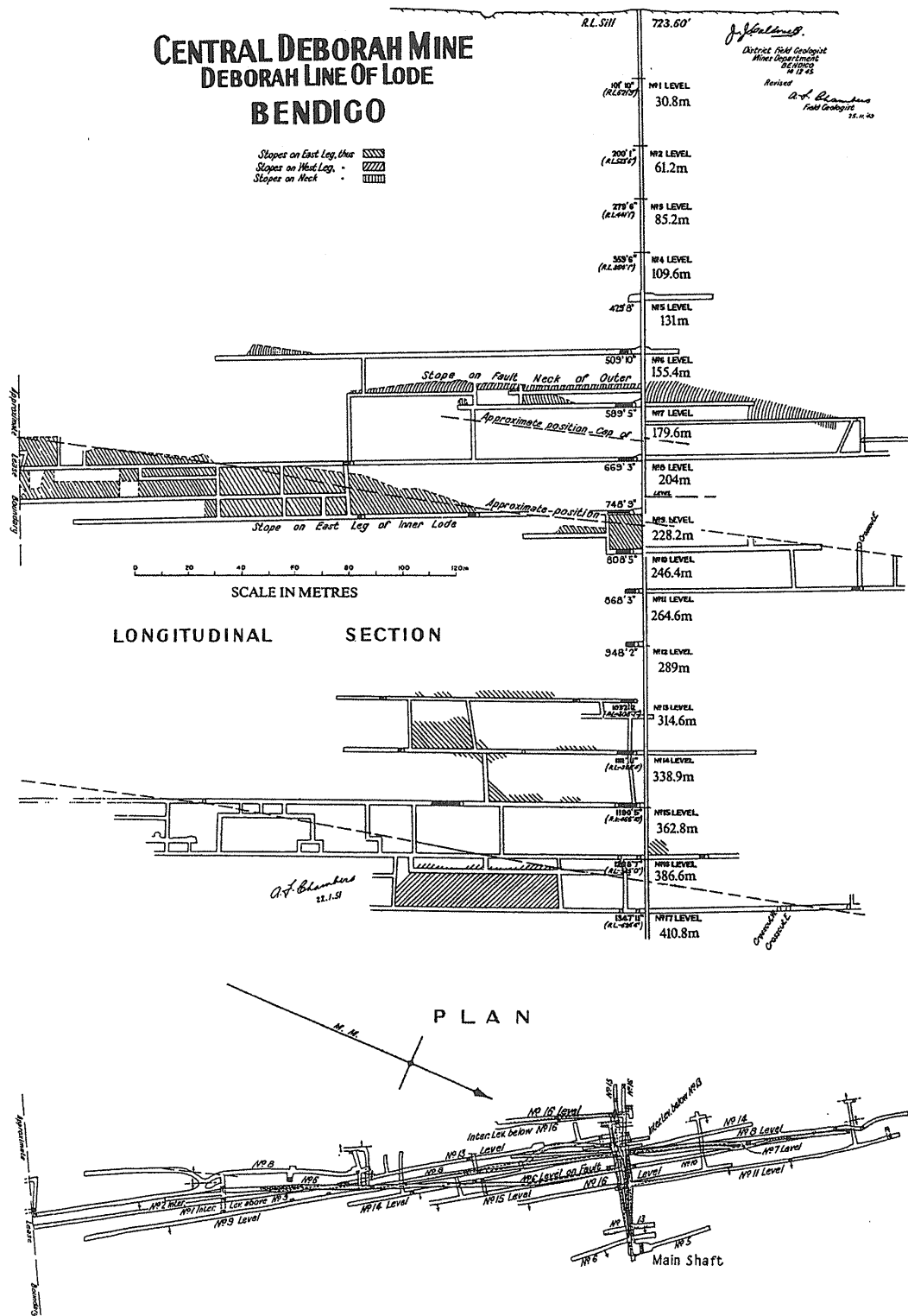
セントラル・デボラ・ゴールド・マインという鉱山跡では、坑道内部の見学が素晴らしかった。まず、みんなヘルメットをかぶり、腰にはバッテリーを装着する。2歳くらいの男の子も赤いヘルメットをかぶり、ウェストにはやはりバッテリーをとりつけてもらった。その子のほか一行は3歳くらいの男の子、小学生の女の子と男の子、高校生とそれぞれの両親、私たちの10人あまりだ。

鉱石を運搬した白いやぐらの中腹から、エレベーターに乗り込むと、ジーンというベルの音を合図に扉が開まり、いきなり地下61メートルまで降りていった。地下の坑道を表した断面図を見ると、この鉱山は地下410.8メートルまで掘り進められていて私たちはNo.2レベルまで降りたことになる。坑内は採鉱中に使われていた道具が展示され、もちろん坑道も本物である。

真っ暗な中をヘッドライトを頼りに進んでいく。鉱夫の休憩所や安全を祈るマリア様もある。少し広くなったところで、耳をふさぐようにという合図がある。削岩機のハンドルを小学生の男の子に握らせ、実際に動かしてみせようということらしい。ガガガー、あたり一面からだを揺するような音が広がり、小さな男の子が泣き出した。まさに臨場感たっぷりである。金を含んだ見事な石英の鉱脈にも手で触ることができた。

セントラル・デボラ・ゴールド・マインは1954年に

注) 1994年、私たちは別子銅山近代化のルーツをたずねて英仏を旅した。イギリスでは産業革命発祥の地、シェロップシア州アイアンブリッジをおとずれ、その近代産業遺産の活用を目を見張った。



第3図 セントラル・デボラ・ゴールド・マインの地下断面図 (Bendigo's Central Deborah Gold Mine and its Era by James A. Lerkより).

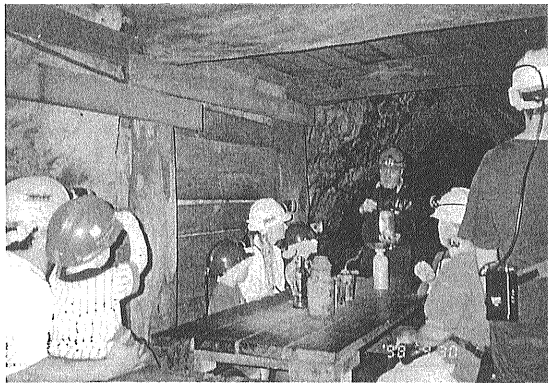


写真5 坑内の休憩所でランプの使い方を説明しているところ(セントラル・デボラ・ゴールド・マイン)。



写真6 地下61メートルの坑内で削岩機を使っているところ(セントラル・デボラ・ゴールド・マイン)。

閉鎖されたが、総産出量は鉱石で6万3千トン、金の量では約929kgにおよんでいる。ちなみに別子銅山は約300年で鉱石量3,000万トン、銅の産出量は約72万トンである。

帰路はシドニーに立ち寄ったけれど、すっかり夏の日差しで、子どもを2、3人連れた若い母親の姿がめだつた。食料品やガソリンも安いし、日本よりくらしやすそうである。

シドニーでは発電所跡の建物を利用したパワーハウスミュージアムを見学した。蒸気機関車やワットのスティームエンジンなどが展示され、直径3メートルはありそうな大きな歯車を動かしたりして見せてくれる。子どもたちが遊べるコーナーもあった。

私たちは、本物の坑道をソプリン・ヒルとベンディゴで見ることができたとともに、オーストラリアのおおらかさもかいま見ることができたことに満足してオーストラリアを後にした。

ちなみに、平成9年版新居浜港統計年報によると、海上出入貨物では輸入、約225万トンのうち、オーストラリアが83.6%を占め、約188万トン。おもな内訳は石炭約127万トン、その他金属鉱40万トン。新居浜とオーストラリアも、また、遠くて近い間柄のようである。

4. 夢を紡いで

鉱山跡から“つわものどもの夢”に想いをはせるとともに、産業遺産として鉱山跡をまちづくりに役立てる私たちの夢を3回にわけてお話しましたが、いかがでしたか。

1994年の英仏訪問では、とても多くの方々のお世話になりました。パリ鉱山学校やサンテ・チェンヌ鉱山学校を案内してくれたジャック・ムットーさん、美智子さんご夫妻をはじめパリとサンテ・チェンヌの鉱山学校、サンテ・チェンヌ市役所のみなさん、日本語をフランス語に翻訳してくれた山口さん、イギリスではトリンダー博士やアイアンブリッジを背景に説明してくれたフォスターさん、みなさん、ほんとうにありがとうございました。

今、新居浜市ではマイントピア別子活用及び活性化推進委員会から第2次提言書が出され、旧端出場水力発電所跡の活用や山村文化の体験工房の整備などが提言されました。また、今年7月23日にはボランティア組織「マイントピアを楽しく育てる会」も発足しましたので、これからの活動を期待したいと思います。

さらに、第三通洞、第四通洞や坑道内の見学、劇場や接待館、鉱山鉄道の復元等、世界を視野に入れた産業遺産の保存、活用と夢はふくらみます。

また、9月18日にはフォスターさんが来新し、産業遺産の保存活用について講演会やシンポジウムが開かれます。海外との交流も図りながら、これらの夢の実現に向けて一歩ずつあゆみを進めたいと思います。

引用文献

産業遺産：加藤康子著、日本経済新聞社、1999年発行。

NISHIHARA Chikako (2000) : Visit to the Mining sites in Australia. — Romance of the Besshi Mine (3) —

<受付：1999年9月7日>